



## 学生と生徒

伊藤 茂樹

(駒澤大学教授)

### I 大学生は「生徒」なのか

学校で学ぶ者のうち、大学や大学院、短期大学など高等教育機関では学生、中学校と高等学校では生徒と呼び分けることは周知であろう（小学校は児童である）。この根拠は学校教育法にあるが、日常会話、特に大学生の会話では彼らのことを「生徒」と呼ぶのが一般化している。

この事実は、筆者も含めて少なからぬ大学教員に違和感を感じさせる。違和感の前提にあるのはおそらく「生徒」と「学生」の間には質的な違いがあるという理解で、それは中等（以下の）教育と高等教育の間の目的や意味の違いに由来すると思われる。

筆者はかつてこのことに注目し、大学生の「生徒化」について論じたことがある（伊藤 1999）。「生徒」とは未熟で他律的、依存的に「教えられる」存在であるのに対して「学生」は自律的、自立的に「学ぶ」者と区別されてきたとらえううえで、現代の大学生が前者に近い姿を示すようになっていたのではないかと考え、質問紙調査の結果を分析した。結果は概ねこの通りで、ということは、彼らが自分たちのことを「生徒」と呼ぶのは中高生と質的な違いがないことの反映であり、実態に即していることになる。

大学も彼らを「生徒」として扱う場面が増えている。懇切丁寧なガイダンスやオリエンテーションで適応を促したり、担任教員が学習や生活にまできめ細かく指導を行ったり、就職に際して手取り足取り面倒を見たりといったことは今日の大学では当たり前になっている。これらは学生の確保や大学の生き残りのために必須の学生サービスであるが、学生を「生徒」扱いして自律や自立を阻害する面があることは否めない。しかし、こうしたあり方は社会的には概ね支持されており、（一部の）教員のみが違和感を感じている。

「生徒化」概念はその後何人かの研究者が大学の学生文化や就職指導について論じる際に用いてきたが（武内編 2003; 堀 2007; 新立 2010 など）、データによって検証されているわけではない。というのは、大学生の行動や意識を過去と比較したり中高生と比較した調査は、筆者も含めて行っていないからである。

ただ時系列的に利用可能なデータの中には、過去に

比べて「生徒化」していることをうかがわせるようなものがある。東京大学の『学生生活実態調査』では1986年から同様の質問を継続しているが、その中で「現在のカリキュラムに満足している」と回答した学生の割合（「満足している」「まあ満足している」の合計）は増加を続け、86年の31.3%から2012年には60.9%へと四半世紀でほぼ倍増している。東大というやや「特殊な」大学のデータであるし、東大がカリキュラムを改革してきた結果という側面も当然あり得るが、大学が提供するものに満足して受動的に受け取る学生像を「生徒化」したものと見ることは可能であろう。

このように、現象としての「生徒化」はなにがしか実在すると前提したうえで、「生徒」と「学生」について、特に大学生に注目したときにどう見るべきか考えてみたい。

### II 大学生の社会的位置

「生徒化」した大学生を見ると、彼らが幼くなったとか成熟が遅くなったなど、彼ら自身の問題と解釈しがちであるが、それではよくある「近頃の若者は」論と変わらず、より構造的な背景を見る必要がある。

そこで押さえておくべき前提として、大学生の社会的位置の変化がある。かつて大学生が自他共に認める「学生」だった時代、彼ら高等教育に進学できた者は、エリート的な（あるいは、それに近い）地位に就ける少数の恵まれた者であり、それは自明の前提だった。その前提のもと、主体的に考え学んだり、学生運動や対抗文化の担い手になって既存の価値観に異議申し立てをしたりしていたのである。

しかし高等教育進学率が上昇して4年制大学だけで5割に達した現在、大学生はもはやそうした特別な存在ではなく「ふつうの若者」である。その彼らが自分のことを「選ばれた者」と認識しないのは妥当なことである。

だとすれば、かつての大学生が他の若者とは異なる者として自ら差異化し、また社会によって差異化されていたのは、実際にその行動やあり方が違っていった（＝自律的に学んでいた）からというよりも、社会的位置ゆえにそのように見なされていた（＝「大学生なら自律的であるはず」）だけなのかもしれない。実際、昔

の大学生が自律的に学んでなどいなかったという事例は少なくない。これを考慮すれば、「生徒化」とは大学生の実態の変化を記述する概念というよりも、彼らについての社会的な位置づけの変化を反映した概念として用いるべきかもしれない。

ただし、呼称が実態を規定したり左右する面も存在する。つまり、「学生」と呼び、呼ばれることでそれに相応しい行動様式や規範が内面化され、自律や自立が促されるという側面である。少なくとも、大学生は自律・自立すべきであるという規範はかつてはより強かった。そのため、たとえ内実が「生徒」と大差なくとも、自らそう呼ぶことは誰もよしとしなかったのであろう。

### Ⅲ 高校～大学の連続

「学生」と「生徒」を質的に異なる者として区別し、「学生」に自律性・自立性を求めるのは、大学生の社会的地位が「エリート予備軍」から「ふつうの若者」へと変化していく過渡期に特徴的な現象だったように思える。この時代には、学校教育法が定めた呼称の違いが両者の本質の違いを表現しているように思えたのではなかろうか。

実は「学生」と「生徒」という2つの言葉自体には特段の意味の違いはない。どちらも平安時代からあり、「学生」（がくしょう）は官僚の養成機関である大学寮や国学の在学者を意味していたが、「生徒」が同じ意味で使われることもあった（海原 1996: 286）。そして両者に共通する「生」という字と「生徒」の「徒」という字はいずれも「弟子」というような意味を持っており、「生」より「徒」が下というわけではない。従って、学校教育法で「学生」が高等教育、「生徒」が中等教育に充てられたのはもともとの語義に沿ってではなく、便宜的な使い分けだったようである。

「学生」と「生徒」の間に実態としても語義としても本質的な違いはなく、かつて存在した社会的な位置の違いもなくなってきたのだとすれば、2つの言葉を使い分けず同じ呼び方をするには妥当性がある。「学生」と「生徒」は「似て非なるもの」ではなく「非して似たるもの」ということになる。

そういえば近年、異なる学校種間の不連続に由来する移行の困難が意識化されることが増え、「小1プロブレム」「中1プロブレム」が取り沙汰されるが、高校から大学へのそれが指摘されることは逆にあまりなくなつたように思う。かつてこれが「五月病」として問題視されていた時代があったが、この言葉を聞か

なくなつて久しいのは、高校と大学の間の不連続が希薄化した結果、「生徒」から「学生」への移行がスムーズにできるようになったことの表れではなかろうか。もちろん実際には移行にあたって不安や困難を感じる者もいるはずだが、それは大学で友人ができるか、「ほっち」にならず居場所を見つけられるかといった交友関係上のことが中心であろう。そしてそれは入学前にSNSで友人を作っておくといった方法で対処可能なことと考えられ、実際そのように対処されている。

### Ⅳ 移行の困難の集中と分散

このように「生徒」と「学生」の間に質的な違いがなくなり、そのことを前提に大学教育が行われて社会的にも支持されているのなら、そこに何の問題があるのだろうか。もともとの語義としても両者に違いはないのであり、殊更に違うと言い張ったり、違いがなくなったことを嘆いたりするのは、ある時代や世代に特有の思い込みではないのか。

しかしそれでも大学生を「生徒」と呼び、「生徒」として扱うことを是認すべきではないと筆者は考える。かつてあった高校と大学の間の不連続は、確かに「生徒」/「学生」に適応上の困難を強いるものではあったが、それは成長の契機にもなっていた。

スムーズな移行ばかりが良いことではない。移行の困難や試練を最後まで免除し続けるのは不可能で、近年は学校種間でのそれが軽減されたぶん、大学から社会に出る局面に、就職をはじめとする困難が集中し過ぎていくように思う。困難や試練を各段階に分散させ、それぞれを「適度な高さのハードル」にするという意味で、「生徒」と「学生」という呼称の違いは積極的な意味を持ってきたのではなかろうか。

#### 参考文献

- 伊藤茂樹 (1999) 「大学生は『生徒』なのか——大衆教育社会における高等教育の対象」『駒澤大学教育学研究論集』15号、海原徹 (1996) 『学校』東京堂出版。  
 武内清編 (2003) 『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。  
 新立慶 (2010) 「大学生の『生徒化』論における批判的考察」『教育論叢』53号、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻。  
 堀有喜衣 (2007) 「大学の就職・キャリア形成支援の現状と課題」小杉礼子編『大学生の就職とキャリア——「普通」の就活・個別の支援』勁草書房。

いとう・しげき 駒澤大学総合教育研究部教授。最近の主な著作に『子どもの自殺』の社会学——「いじめ自殺」はどう語られてきたのか（青土社、2014年）。教育社会学専攻。